

【コメント】

王権と貴族・武人 —新羅・高麗史と中国史の比較から—

辻 正博
滋賀医科大学

朝鮮史の専門家からのコメントは別に用意されていることと思うので、ここでは中国史の立場から気づいたことを二、三申し述べさせていただきます、コメンテーターとしての責めを塞ぎたく思う。

1. 新羅における王権と貴族—南北朝・隋唐との比較から

姜教授の報告は、新羅王朝において貴族が武人から官僚へと性格を転換させてゆく過程について論じたものであり、中国中世～近世の政治制度史を研究しているわたくしも非常に興味深く拝聴することができた。

一般的に、中国史でも国土を統一する過程においては、武人（戦士）が重要な役割を果たす。しかし、国家経営の担い手——戦時にあっては物資補給や人員手配などの後方業務の担当者——は、通常、文人官僚であり、武人は統一戦争が終わると、主役の座を文人に譲る（あるいは奪われる）のが通例であった。

姜教授によれば、新羅王朝における貴族の原型は、戦士、すなわち国土統一に功績のあった武人貴族にあったという。勝利者となった武人がそのまま権力の中枢の座に就いた、ということであろう。武人は貴族として政務を執るものと思われるが、その場合、彼らの戦士としての性格はどのようにして保持されるのであろうか。武人貴族が文人化する契機は存したのであろうか。

この問いに対して姜教授は、新羅王朝が律令制と官僚的行政制度を中国から導入した点を重視し、これらによって新羅支配層は徐々に文人的性格を帯びていったと説明される。文書行政を根幹とする中国式の政治システムを機能させるために、官僚には儒教的素養が必要となり、このことが元来武人貴族であった新羅の支配層を文臣官僚とするのに決定的な役割を果たしたとされるのである。

しかしながら、新羅王朝はかかる中国的政治システムの導入に必ずしも成功しなかったように思われる。姜教授も指摘されるように、新羅固有の骨品制とそれとが二律背反的な関係にあったからである。王京人を対象とした血縁的身分制度たる骨品制が存続する限り、貴族としての地位は世襲される。それは、人事考課制度に裏打ちされた官僚制度と相容れない性格のものである。8世紀前半に試みられた「丁田制」（壮丁に一定面積の田地を支給する制度）が短期間のうちに廃され、新羅時代のほぼ全般を通じて「禄邑制」（ある地域に対する一定の支配権を俸禄として貴族に賦与する制度）が行われたのは、この意味で当然であった。

籍帳制度からも同様のことが窺われる。中国の籍帳が行政村落単位で作成されたのに対して、新羅の籍帳は自然村落を単位として作られたという。これは、村落が共同体として十分に機能していたことを示すものであり、貴族はかかる村落を存立基盤として維持していたことを物語っている。当時の社会のあり方は、新羅王朝が中国風の中央集権的な政治体制をそのままのかたちで実現させることを困難ならしめていたのである。

ひるがえって、中国史の立場から新羅王朝の施策を見たとき、次のような疑問が生じてくる。すなわち、王が中国風の律令制度の導入を目ざし、それが表面的であるにせよ実現した（7世紀後半には中央官制が整備された）のであるから、貴族たちは王に仕える官人として王宮に出入りしたはずである。あとは、王命による人事異動で彼らを官僚として動かし、これに従わない者は律令により処分すればよい——少なくともこれが、新羅が学ぼうとした中国的律令官人制の通常スタイルであった。隋唐の官人たちは、それが栄転であれ左遷であれ、任命されたことを皇帝に謝して赴任したのであり、これを拒否するなど、門閥貴族が優勢であったとされる六朝時代においてさえ、普通ではあり得ないことであった。これをもって儒教的君臣秩序と言うのであれば、それはその通りであろう。

しかし不思議なことに、新羅王は、貴族に対して自己の立場を優越ならしめるための方策を積極的には講じていないように思われる。たとえば、科挙制の導入である。隋唐帝国における科挙制導入の意義は、能力本位の人材登用を制度化した点にある。もちろん、科挙の後に控える吏部の選銓（任官人事）では、「身言書判」（身なり、言葉遣い、筆跡、美文表現力）といった貴族的特質が重視され、また、初唐あたりはまだ科挙出身者よりも任子出身者（高官・貴族の子弟）のほうが優勢であったけれども、皇帝が自分の手足となって動いてくれる人材を科挙出身者のなかに見出すことで、両者の力関係は逆転することとなった。中国の律令制を採用し、国内でも儒教的素養が重視されるという状況の中で、新羅王が科挙制度を採用して貴族の牙城に風穴を開けることをしなかったのは、いかなる理由によるのであろうか。新羅王にそれだけの政治力がなかったというのであれば、王の王たる所以は何であったのか。かつて武人貴族をまとめ上げて国土を統一した王が、統一後は貴族勢力の掣肘を強く受けてしまうというのは、政権構造の観点からも、じつに興味深く思う。

今ひとつ、姜教授の報告を拝聴して興味深く感じたのは、国土統一戦争における貴族の役割とその後の位置づけについてである。この点についても、中国史との比較の観点から若干の感想を申し述べたい。南北朝時代を例にとりて、話を進める。

北朝の場合、政権に参加した貴族は、多かれ少なかれ在地の名望家として勢力をもっていた。郷里の人々を戦乱による困窮から救うため、貴族は時に武装し、時には私財をなげうった。北朝の皇帝たちは、在地の名望家としての貴族の力を利用すべく積極的に政権内部に取り込み、貴族もまた、民衆のためとて招聘を受けて国政に参画し、自らの理想の実現を画策したのである。

この場合興味深いのは、貴族に対する評価のあり方である。彼らは戦争に参加し、それなりの功績を挙げることもあったが、戦士あるいは将軍としての優秀さが強調されたり、積極的に評価されることは、まずなかった。重要なのは名望であり、それは人々の師表となる生き方に

基づくものであった。単に何代も続いた名家の出身というだけでは、人々の尊敬を受けることはできなかったのである。

南朝の場合、門閥貴族は「九品官人法」によって半ば自動的に高官に就くことが約束されていたけれども、彼らとて戦時にあっては、軍を率いて出陣することもあった。しかし、評価されるのはあくまでも将帥としての統率能力であり、戦士としての側面が強調されることはなかったと言ってよい。平時には政治家（文人）としての能力が重視されたこと、言うまでもあるまい。

翻って考えてみると、秦の全国統一以来、新たに獲得した領土を経営するために派遣されたのは、武人ではなく文人官僚であった。地方に強大な軍を置いたり、あるいは地方勢力にある程度の軍事力を与え、それによって安寧をはかることを積極的に行なった王朝はなかったと言い得る。西晋王朝は成立時に諸王、すなわち皇帝の親族を各地に分封して地方統治を委ねたことがあったが、結局は相互の軍事的対立（八王の乱）を招き、王朝は滅亡への道をたどった。封建制の試みは、ものの見事に失敗したのである。その後も南朝では、軍事的な理由から皇帝の親族に地方軍団の統率を委ねることはあったが、それ以外の貴族をそうした職務に就かせることは極力避けられた。

総じて言えば、南北朝時代の中国では、貴族が軍事に関わることはあったものの、平時には文人として活躍することが期待され、貴族のほうもまた、文人として身を立てることをあるべき姿と考えた。ほぼ同じ時代、新羅王朝において武人貴族が勢力をもったのとは、まさに対照的であったと言えよう。

2. 宋朝の武人と文人—高麗との比較から

Shultz教授の報告は、高麗王朝における武人と貴族の均衡保持の試みについて論じたものであったが、わたくしは、高麗が影響を受けたとされる宋朝との比較の観点から興味深く聴き入った。以下、宋朝の制度における文人と武人（文官と武官）の関係を述べて、コメントに代えたいと思う。

Shultz教授によれば、高麗の建国もまた武人の力に負うところが大きかったけれども、国土統一後、廷臣（文人官僚）によって中国風の政治制度が確立されると、武人の影響力は大幅に後退し、廷臣が統治の中枢を掌握し、貴族が政府の主要ポストを独占するようになったという。

高麗が模範とした宋朝の創始者・太祖趙匡胤もまた、純然たる武人であった。五代最後の王朝、後周の禁軍を統括する立場にあった彼は、幼帝が即位すると部下の推挙をうけて易姓革命を敢行した。建国当初の宋朝は、北からは契丹（遼）、西北からは党項（西夏）の軍事的圧力を受け、南には十国の残存勢力が控えるという、厳しい緊張状態の中におかれていた。華中・華南の統一に20年近くの歳月を要し、北方の失地に至っては遂に奪還することができなかったけれども、11世紀前半までに契丹・西夏との講和が成立すると、宋朝はようやく軍事的緊張から解放されることとなった。

国土の統一が進展し戦争終結の目途が立つと、宋朝は、膨れ上がった軍隊組織を整理・統合

する必要に迫られた。多くの兵員を抱え、軍事費が無視できぬほどに膨らんでしまっていたからである。この背景には、安史の乱を契機に各地に節度使が置かれ、将校も兵士もすべて職業軍人化していたという事情がある。敵対勢力の将兵を吸収して軍の規模を拡大することは、戦争を継続する上で必要ではあったが、その代償として莫大な出費が伴った。軍隊規模の適正化は、いずれ避けて通ることのできぬ問題だったのである。

「馬上で天下を取ることはできても、馬上で天下を治めることはできない」とは、漢の高祖劉邦以来、中国統治の本質を端的に言い表わしたことばとして有名である。唐末五代の乱世を承けて、新しき統一王朝たらんとした宋朝にとって、中央禁軍の強化と節度使勢力の解体とは、なんとしてもやり遂げねばならぬ課題であった。幸い、五代の各王朝が禁軍の強化に取り組んできた結果として、宋の中央禁軍の軍勢は、地方に居並ぶ節度使勢力に較べて相当優勢であった。これを背景に、太祖は有力な節度使を一堂に集め、そこで徐ろに彼らに引退を勧告した。そして節度使たちはこれを黙って受諾したのである。いかに引退後の安らかな生活が約束されていたとはいえ、中央政府の討伐を幾度となく退けてきた唐末の節度使のことを思えば、まさに隔世の感を禁じ得ない事件であった。かくして国内の軍事的緊張は一気に解消されてゆくことになる。

節度使トップに較べれば、将校・兵士の処遇は比較的簡単であった。戦闘要員として使える優秀な将兵とそうでない者との選別が行なわれたのである。使える者は禁軍に編入され、兵士として役に立ちそうもない者は、希望に応じて「廂軍」と呼ばれる地方の労役部隊に送り込まれた。依然として彼らには給与が支払われたが、禁軍と廂軍とでは待遇に相当の格差が設けられ、また廂軍の人員整理も折に触れて実施された。不用の兵士を一斉に解雇しなかったのは、社会秩序を維持するうえで賢明な選択であったと言える。軍を離れば生業を失う——しかも武器の扱いに多少は通じている——人々を養う廂軍は、社会の安定装置として宋代を通じて存続した。のちには刑徒も廂軍に編入され、下級兵士として労役に服するようになった。給与は、こうした刑徒にも支払われたのである。「良い鉄は釘にはならぬ、良い人は兵にはならぬ」という俚諺は、兵制のかかる実情をふまえたことばとして理解すべきであろう。

このような宋朝の軍制の頂点に立つのが、枢密使とよばれる軍政長官であった。民政長官たる宰相と並んで、文武の行政を取り仕切るこのポストには、建国当初より文官が任命された。節度使の武装解除と相俟って行なわれた軍事上の指揮命令系統の改革により、現場の将軍には実戦の指揮権のみが与えられ、発兵権は枢密使が握ることとなった。「国家は武臣を遇する際に、その俸禄は厚くし、礼遇は低くした」とは、宋代のある文人のことばである。宋朝の武人に対する姿勢を言い当てた評語として味わうべきであろう。

全体を統轄する存在として皇帝が君臨したことは言うまでもあるまい。国家のあらゆる事項について責任を負わねばならない皇帝を補佐する高級官僚は、原則的として文官のポストであり、いわゆる「文官至上主義」が実現することとなった。

宋朝の文官重視の姿勢は、科挙制度のあり方にも反映されている。一般に「科挙」と言えば、文官を採用するための文科挙を指すことから明らかなように、武官を採用すべく行なわれる武科挙は概して低調であった。文科挙が3年に一度の割合で定期的実施されたのに対して、

武科挙は恒常的に行なわれたわけではなく、1回の合格者数も文科挙の一割以下と少なかった。また、文科挙（なかでも進士科）に上位で合格することが官界で出世するための必須条件と考えられていたのに対して、武官への道は、胥吏（無給の下級役人）で年功を積んだ者や中～高級武官・戦没者の子弟にも開かれており、数から言えば、そちらのルートから武官となる者の方が遥かに多かった。言い換えれば、武官となる者には、試験で試すほどの知識や技能は求められていなかったのである。

官界において武官と文官との人材交流が全く無かったわけではない。武官としてある程度の経歴を積んだ者は、希望すれば——そして一定の条件を満たせば——文官に転換することができ、逆に文官から武官に移ることも認められていた。但し、武官から文官に移る際には、儒教の基本経典についての試験が課された。無学の者を文官の世界に入れるわけにはいかなかったのである。